ゐのはな

千葉大学医学部同窓会報　第120号　　題字　故 鈴木五郎（大11卒 元ゐのはな同窓会長）

編集発行者
千葉大学医学部
ゐのはな同窓会報編集部
〒260-8670 千葉市中央区亥鼻1-8-1
千葉大学医学部内
ゐのはな同窓会
電話（043）222-7171 内線5026
e-mail:idosokai@med.m.chiba-u.ac.jp

新春に寄せて

千葉大学医学部同窓ゐのはな会の最近の道程に就いて

ゐのはな同窓会副会長　貫洞一夫（昭22卒）

新春にあたり、昨年は、井出源四郎ゐのはな同窓会会長にご寄稿いただきましたが、本年は、貫洞一夫副会長に、東京ゐのはな会長就任のご挨拶と共に一文をお寄せいただきました。

既に御報告しました通り、加納六郎先生が突然の御病気の為辞任され、伝統ある同窓会の役員に推挙を受けました。浅学非才その任でありませんが、役員会の結果、加納先生の残任期間を務める事に決定されました。

私と同窓会との関係は、故大塚文郎会長の指示で、当時の東京在住の同窓の若い者達が集められ、「ゐのはな同窓会の新しい在り方」の方針の下、革新的、積極的活動を我々に強く指導下されました。

先ず、大塚先生の全く利益を無視した多額な個人的出資による会の運営で、我々は唯々感心し、その要望に答えざるを得ませんでした。この当時の人材が、現在の東京ゐのはな会発展の下地を造ったものだと考えています。

故大塚会長は、昭和43年6月会則を定め、会の構成を定め、支部組織を決定し、本部は会務を遂行し、組織は別項細則により運営されることになり、役員が決定されました。

その後東京ゐのはな会は、昭和46年嶋田宗之会長、中村民比古会長等を経て、昭和63年6月名尾良憲先生が、会長になり、役員も一段と若がえりしました。

処が昭和63年6月、千葉の小林金市先生を始め各方面の要望で、名尾良憲先生が全国ゐのはな会長に就任する事に決定しました。

当時も医療環境は、厳しく同窓会とて一致団結し、長期展望の下、綿密な計画を立てて、若年層の人々の同窓会に対する期待と要望に答えねばならないと常々香月学長にも激励されて居ました。

早速、名尾会長は、「大学、東京、千葉」の3部にそれぞれ副会長を決定しました。

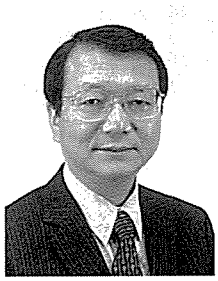
2期目（3年後）役員再任をされるや、会の活性化の1つとして、平成3年11月、ゐのはな同窓会編集委員会を改組し、編集委員長として井出源四郎元学長に

（二面に続く）

教授就任挨拶

千葉大学医学部外科学第2講座

落合武徳（昭41卒）



1998年10月16日に千葉大学医学部外科学第2講座の教授を拝命しました。瀬尾貞信、中山恒明、佐藤博、磯野可一先生と続いたそうそうたる先代を思うと、我が身の卑小さを恥じ入るばかりですが、私なりに力いっぱい頑張ろうと心ひそかに期するものを感じております。

良い医師とはscience（科学性）、art（技術）、humanity（人間性）に優れた人といわれていますが、これは外科医にもあてはまると思われます。外科医は、診断や手術におけるartを身に付け、さらに一層の向上を目指して精進する事が重要で、私達にとってそれが面白く、また生涯の目標であり、生きがいともなっています。しかし、一方では患者さんも好きこのんで手術を受ける訳ではありませんし、患者さんの心の痛みを理解できるhumanity豊かな外科医である事が要請される時代になってきました。

癌の手術方法について見ますと、19世紀後半のハルステッド以来の拡大廓清の概念が見直され、昔では考

（二面に続く）

ゐのはな同窓会賞受賞候補者募集要項

第4回（一九九九年度）ゐのはな同窓会賞の受賞候補者を左記により募集致します。

一、受賞対象者

①学術賞　本会員（甲および乙）で、医学研究あるいは医療活動の顕著な業績により、学術的あるいは社会的に高い貢献をした個人またはグループ。特に学外の教育研究診療機関に居られる方と、学内では学位取得直後の層からの応募を歓迎いたします。

②功労賞　医学および広く文化の各領域において、千葉大学医学部および千葉大学ゐのはな同窓会に多大の貢献をした者。

二、表　彰

①学術賞（三件以内）楯および副賞（総額百五十万円程度）を贈呈します。

②功労賞（一－二件）楯および薄謝を贈呈します。

三、応募方法

所定の申請用紙により、一九九九年1月5日から3月5日までの間に申請して下さい。

四、受賞者の決定

常任理事会の議を経て、会長が行ないます。

五、問い合わせおよび申請用紙請求先

千葉大学医学部内　ゐのはな同窓会事務室

右選考は、「ゐのはな同窓会賞選考規定」（ゐのはな同窓会報第一一六号参照）にもとづいて行われます。

最終講義・記念式典のご案内

一、最終講義

○近藤洋一郎教授
日時　平成11年1月26日(火)　午後2時30分
場所　医学部附属病院第一講堂
演題　肝再生について

○藤村眞示教授
日時　平成11年2月2日(火)　午後2時30分
場所　医学部附属病院第一講堂
演題　はじまりのはじめ

○若新政史教授
日時　平成11年2月3日(水)　午後2時30分
場所　医学部附属病院第一講堂
演題　基底膜病の基本概念の提唱

○米満博教授
日時　平成11年2月12日(金)　午後2時30分
場所　医学部附属病院第一講堂
演題　臨床検査の過去・現在・未来

二、記念式典（合同）
日時　平成11年3月13日(土)　午後2時
場所　医学部附属病院第一講堂

○記念講演
日時　平成11年3月13日(土)　午後4時
場所　医学部附属病院第一講堂
演者　千葉大学文学部教授　飯田亘之氏
演題　生と死の哲学

○祝賀会
日時　平成11年3月13日(土)　午後5時
場所　医学部附属病院第三講堂

教室だより

形成外科

教授　一瀬正治（昭43卒）

当形成外科は、平成5年開設が認められ、平成6年1月より一瀬正治が、教授に就任し、1人で診療を開始した。同年4月より医員と2人の研修医を迎え、さらに6月より文部教官助手1人を加え入院、外来診療に可能な限りの力を注ぐことになった。平成8年度に助教授ポストが増員となり、診療のみならず学生教育にも積極的に従事することとなった。その後、若い医局員が毎年仲間に入ってくれ、総勢20人になった（千葉大卒14人、他大卒6人）。当科では、形成外科認定医になるためには、外科系研修2年以上と形成外科研修4年が必要との方針で指導している。そのため、形成外科の色に染まる前に、多くの医局員が学外で研修中で、真面目に外科研修に励むうちに、形成外科医になるための研修ではもの足りなくなりそのまま帰局しないケースも生じている。何時の日にか、医局員一人一人が医局に愛情と誇りをもってくれる日の来ることを期待しつつ、医局員一人一人を大切にする医局にしたいと努力中である。

診療は、千葉県をはじめ東京都、関東一円から同門会の先生方より多くの患者さんをご紹介いただいて、幅の広い形成外科分野にわたる疾患を経験させて頂いている。そのお陰で、当大学ではあらゆる分野の手術を行い、よい結果が出てきているので、研修医をはじめ学生にとっても教育効果が上がっているものと嬉しく感謝している。今後とも、ご紹介宜しく、紙面をお借りしてお願い致したい。

当科は入院業務は、病床8（予算病床12）と少ないため、皮膚科をはじめ多くの科の好意により病床を借用して何とか入院患者の治療にあたっている。外来業務は、看護部をはじめ事務部の多大なる御支援と御配慮により、外来手術をはじめとする診療を毎日満足のゆくまでやらせて頂いている。

最後に、形成外科診療の対象疾患を具体的に記し、近い方、遠い方にかかわらずご紹介をお待ちしております。ご満足いただける治療をしてお返しできるよう医局員一同日々努力致しておりますので、ご意見、ご希望など何でも一瀬までお寄せ下さい。

【千葉大学形成外科で取り扱っている疾患】

＊各種外傷による顔面をはじめとする全身の醜状変形（顔面などの傷跡の形成、顔面骨折、上・下顎骨折、鼻骨骨折、義眼床形成、火傷による傷痕、引きつれの形成など）

＊先天異常による変形（顔面裂、斜頭、顔面半側萎縮症など顔面非対称例、クルーゾン病、アペール病などの顔面形成不全症、眼窩隔離症、口唇裂、口蓋裂、眼瞼下垂、耳介欠損、耳介変形、合多指趾症など四肢先天異常、血管腫、レックリング・ハウゼン氏病、母斑など

＊悪性腫瘍摘出後の各種再建（顔面再建、口腔再建、食道・咽頭再建、乳房再建、胸壁・腹壁再建など）

＊美容外科一般

（新春に寄せて　一面続き）

就任をお願いし、強力な編集委員会を確立し、57号よりやっと軌道に乗りつつあった会報を、一〇〇号記念号を期して、定期刊行を厳守し、井出先生の御方針通り、増員や増刊を実施し、内容の充実を計り、やっと現在の様な会員の期待に沿えるものに発展しつゝあります。思えば、長い道程で、その内の数々の辛苦が偲ばれます。

又名尾会長は平成4年11月より、神奈川県、山梨県、静岡県、埼玉県、栃木県、茨城県、群馬県、長野県各支部より、常任理事を1名ずつ増員し、本部役員構成を充実拡大しました。歴史は変遷し、名尾会長が2期終了後平成6年6月に、現在の井出源四郎会長にバトンタッチされ、更なる発展を続けております。

平成6年6月より、私は、又加納東京ゐのはな会長の副会長として働いていましたが、加納会長の病気辞任により、前述の様な次第となったわけであります。

然しその6年間、東京ゐのはな会は、小幡副会長の積極的活動にて、勤務医部会の構成改革充実が実りつつあります。病診連携の問題や、又本学出身者の教授や病院役員も従来通り増加しつつあります。何れにしても若い世代の開発が急務の目標でありましょう。次の世代の強力な発展を祈らずにはいられません。本年は、関東ブロックの更なる発展と、円滑な共同協力作業の増進を期待します。井出会長以下各役員の健康と会の運営の着実な発展を祈ります。私とて、非力をかえりみず、努力する積りです。

（教授就任挨拶　一面続き）

えられないような縮小手術も行われるようになりました。問題なのは拡大廓清か縮小手術かという事ではなく、術式の選択がどのような科学的な根拠に基づくのか、すなわちevidence based surgeryを追求する事がこれからの外科臨床の大きな課題だと思っています。

現在大学では、第1第2という従来のナンバー外科のありかたの見直しが話題になっており、今回の第2外科の教授選考においても、第1外科との専門性が議論されたとうかがっています。たしかに、100年の歴史と伝統に基づいているにせよ、ひとつの病院の中に二つの講座が同じ事をテーマにしている事が妥当かどうかを再考する必要があると思われます。今後、両外科における専門性の分化、およびそれに続いて両外科の統合（大外科教室）が議論される事があるかもしれません。これらの問題には関連病院の問題、卒後外科臨床研修をどうするか、外科専門医制度との関連など、考慮しなければいけない問題が多々含まれており、また先生方の出身教室に対する思いも無視してはいけません。机上の空論にならないよう気をつけながら、慎重且つ断固たる対応が必要です。両外科の同門会の先生方の御理解をお願い申し上げます。

当面のモットーを「明るく、開かれた第2外科」としています。ゐのはな同窓会の先生方の御支援と御協力をお願いする次第です。

東京ゐのはな会長就任の言葉

貫洞一夫（昭22卒）

加納六郎会長の突然の手術に関しては、会長のご挨拶の中で詳細に述べられて居られ、その後経過も良好ではありますが、当分体力回復に努めたいとの本人の強いご希望により辞任されたいとのことでありました。

ついては、早速、東京ゐのはな会支部長役員会を開催し、この件について会議を行い、加納会長のご希望を了解し、会長残任期間をとりあえず私が会長に就任することと決定しました。次いでそれに伴い、新役員変更も一部行い、決定されました。

偶々、当日はゐのはな会井出会長のご紹介にて、本部ゐのはな会報編集委員長、鈴木信夫教授及び千葉大学医学部渉外委員、栗山喬之教授さらに編集委員の古関明彦教授も出席され親しく御懇談下さいました。

勿論、東京ゐのはな会長の職は私にとっては任が重く、とてもその器でもありませんが、加納会長のご指示もあり、とりあえず会長残任期間をお引き受けすることとなりました。従って、同時に加納先生の後任として千葉大学医学部同窓会ゐのはな会副会長にも就任することになりました。

当然のことながら、各役員、各支部長及び会員の方々のご協力、ご援助が無ければ何もできませんのでよろしくお願い申し上げる次第であります。

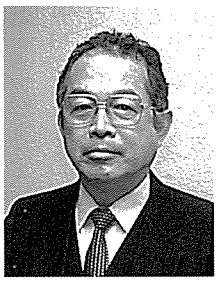
私とて、健康には大した自信はありませんが、一生懸命頑張るつもりですので宜しくお願い申し上げます。

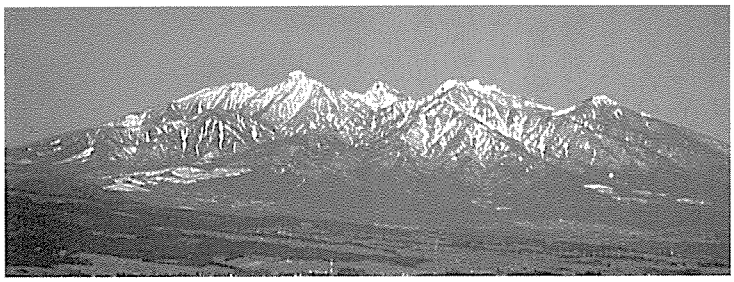
平成10年10月1日

すので、各位の御協力をお願い申し上げ、最近の会の道程をふり返ってみました。

山梨医科大学病院長、副学長に就任して

塚原重雄（昭36卒）





南に富士の霊峰、西に南アルプス連峰、北に八ヶ岳など日本の代表的な山々に囲まれた甲府盆地に時代の要請に対応して山梨医科大学は1県1医大の構想の下に20年前に単科の国立医科大学として設立されました。

平成10年秋には開学20周年行事を開催いたしました。甲府からでも約1時間半で都心に行けるという地の便から、それまでは患者さんの流れは都心に向かっていましたので、開院当初、果たして患者さんが来院してくれるかどうか大変危惧されました。本院は当所来院患者数五〇〇から六〇〇名を想定して全ての施設が設計されましたが、ここにきて毎日一〇〇〇名前後の患者さんが来院されるようになり、約一九〇〇台駐車可能の駐車場も満杯で、患者さんから駐車場への不満が、訴えられるようになり、ゲート方式の採用、有料化を考慮せざるを得ない状態にまで外来患者数が増加しています。患者さんの大病院指向もありますが、我々当事者としては大変有り難いことです。一方ことほど左様に全ての施設の増設が待たれますが、国立大学ですので、中々実現には時間がかかると思われます。

所で、小生、17年前に眼科学講座の開講と共に当地に赴任し、本年4月1日付けで病院長、副学長に図らずも加藤精彦前病院長の後任として就任して、約6ヶ月が経ちました。無我夢中で過ごした6ヶ月でした。皆さん御存じの様に医科大学ですから、一つの顔しか持たない専任の病院長ですが、後任が決まらないため眼科教授を併任していることもあって、極めて忙しく、厳しい日々を体験しています。毎日次から次といろいろな問題が湧出してまいりまして、中々じっくりと物事を考える暇がないのが現状です。病院長職が傍で見るより大変な激職であることを思い知らされています。また、現在、いかに多くの問題を国立大学付属病院が抱えているかを十分知らされた6ヶ月でした。文芸春秋5月号の〝病院沈没〟（これは山浦晶病院長から勧められて読みました。山浦教授には常置委員会委員長として何時も大変お世話になっています）、医療企画社の〝医療ビッグバン〟を読んでいただけると分かりますが、我が国の医療は大変な転換期を迎えていることには間違いありません。これから21世紀に向けて、特に医療、研究、教育の3本柱を担っている国立大学付属病院が現在我が国で進められている行財政改革の影響を最も受ける立場にあることを認識させられました。少子高齢化社会、医学、医術の目覚ましい進歩、医師過剰、日本の経済状態の悪化、それに伴う医療財政への逼迫、疾病構造の変化、情報公開と患者意識の高まりなど、どれをとっても、医療を取り巻く環境に著しい変化がおこっています。国立大学の独立行政法人化が国会で議論され、近い将来実現されるかも知れないと噂されています。山梨医科大学は近い将来存在しなくなるかも知れません。このような中で、山梨医科大学付属病院も社会のニーズに合う医師を生み出すことを目的とすると共に、特定機能病院としての特色を生かして、地域医療の為にいかに対応してゆくか全職員が自分のこととしてそれぞれの持ち場で何をすべきか真剣に考えなければなりません。小生、皆さんに病院長就任おめでとうと言われますが、大変な時に病院長になったなあと言う気がしております。御目出度いどころかこれから大変な苦しみが始まるのではないかと覚悟しています。

山梨唯一の国立大学病院として、高い医療水準を絶えず保ちながら、地域住民の為にあらゆる疾病にたいして何時でも満足できる医療を供給できる体制作りをしなくてはなりません。スタッフや医療機器の充実ばかりでなく、教育、研修、研究の場の提供により地域の医療従事者の自己学習、生涯教育にも貢献できねばなりません。地域の診療所、病院との連携を深め、病院の人的、物的機能をこれらに積極的にいかしてゆく必要があります。

患者から愛され、親しまれ、安心して受診できる病院、職員が生きがいと誇りをもって働ける病院にするためにはどうしたらよいか、各職場であらゆる機会をとらえて議論し、できることから実行して行かねばなりません。

たまたま、私が病院長に就任して早々に、6月25日、26日と2日間山梨医科大学が主催して全国国立大学医学部付属病院病院長会議が山梨で挙行され、〝大学病院運営改善〟、〝卒後研修制度2年間必修〟、〝情報公開法への対応〟、〝患者本位の医療〟を主題として多くの問題について熱心な討議が行われたことを附記させていただきます。この際常置委員長校の千葉大学の事務部門の皆さんに大変お世話になりましたことを感謝申し上げます。また、国立大学病院院長として富山医科薬科大学病院長片山喬教授（昭30）、筑波大学付属病院長深尾立教授（昭39）のお2人の本学出身の病院長が参加されていて大変心強く感じた次第です。丁度これを書いている最中に、事務部門のワーキンググループから山梨医科大学付属病院の運営改善策についての提言がまとまり提出されて参りましたが、大変時宜をえた提案で、これが山梨医科大学付属病院の改革の端緒になればと考えています。

最後に丁度良い機会ですので、山梨の本学出身者について少し触れてみます。山梨県は人口80万人の小さな県ですが千葉大出身者が比較的多いところで、山梨県医師会長に溝部孝二先生（専27）が就任されておられます。私の専門分野の眼科では佐々木芳岡先生（専19）が眼科医会会長を長年に渡ってお勤めでしたし、小林清房先生（昭27）が事務局長役でいろいろと助けていただき、教室員も年々増加して在籍した教室員も80名を越える程になり、外来患者数、手術件数、稼働率は本学のなかで最高ですしこのようなことが小生が病院長に推挙されたもとになっていると思われます。山梨県立中央病院前院長赤星至朗先生（昭33）、山角病院長山角博先生（昭36）も地域医療の面で大活躍しておられます。ここまで書いてきて本学創立以来御一緒させていただいてきた、またいろいろと御教授いただいた故内山暁教授（放射線医学講座　昭33）のことを思いだしました。先生が御存命なら教育、医療に大変見識をお持ちだったので、今頃丁度学長職におつきになり、〝塚原君病院の改革をこのようにしたら〟といろいろと指摘くださっているだろうにと思えて誠に残念です。心から御冥福をお祈り申し上げます。

＊　＊　＊　＊　＊

ゐのはな同窓会への寄附

平成6年卒クラス一同、九万三千四百九十四円
大谷　克巳名誉教授（金沢昭21）　三万円
上野　高次　氏（昭23）一万円
稲田　正実　氏（昭25）一万円

大阪市立大学医学部病理学第二講座教授の就任にあたって

上田　真喜子（昭50卒）

平成10年4月1日付で、大阪市立大学医学部第二病理学教室の教授に就任致しました。

私は昭和44年、千葉大学医学部に入学しましたが、今でも、千葉大の学生時代のある日の出来事を思い出します。系統解剖実習の初日の日、どうしても実習室に入る勇気がなくて、私がもう1人の女子学生と廊下でウロウロしていたら、同じ班の男子学生の1人が「もう御遺体の顔にハンカチをかけてあるから、こわくないよ」と言って迎えに来て下さり、そしておそるおそる実習室に入って行った日のことを…。このようなきわめて頼りない学生でしたが、解剖実習やその後の医学部の講義・実習等を通じて鍛えていただき、昭和50年千葉大学医学部を卒業いたしました。千葉大学での学生時代にお世話になった諸先生方、また同門の諸先輩、並びに同級生の皆様にあらためて深く感謝申し上げたいと存じます。

昭和50年医学部卒業後、東京の三井記念病院小児科で研修医、続いて医員として勤務していましたが、夫の転勤に伴い大阪に転居し、昭和53年から大阪大学小児科の関連病院であるガラシア病院小児科に勤務しました。ちょうどその頃、千葉大学ゐのはな同窓会関西支部の例会が大阪で開催され出席しました折、私が千葉大学在学中に病理学を教えていただいた岡林　篤教授のお弟子さんで、藤本輝夫教授という先生が大阪市立大学医学部第一病理学教室におられて腎臓病理を御専門にされていらっしゃるということを同門の先輩でいらっしゃる宇佐美暢久先生（昭31）（住友病院内科）から教えていただきました。私は三井記念病院小児科の時には、小児腎臓病の患者さんの治療に力を注いでおりましたので、腎臓病理をもう少し勉強したいと思い、昭和54年大阪市大の大学院（病理学専攻）に進学しました。当初、大学院を卒業後は再び小児科に戻るつもりでおりましたが、大学院1年の終了の頃、第1病理学教室の講師と助手の先生が相次いで退職されることとなったため、藤本教授から大学院を中退して第1病理学教室の助手にならないかと言われました。そこで、大学院を中退して昭和55年より大阪市大第1病理学教室の助手になりました。以後、オランダのアムステルダム大学医学部病理学教室（Anton E. Becker　教授）への留学、講師、助教授への昇任を経て、平成10年4月から、櫻井幹己教授の後任として、それまで私にとりましてはお隣の教室でありました病理学第2講座を担当させていただくことになりました。このように、昭和54年以来、大阪市大医学部でお世話になってまいりましたが、この間、大阪市大の多くの師や先輩の御指導、御厚情を賜り、また多くの研究仲間の暖かい御支援に支えられてここまで育てていただきました。このことは、本当にありがたく深く感謝いたしております。

大阪市大医学部第1病理学教室は、故岡林　篤千葉大学名誉教授が千葉大学に赴任される前の昭和24年～昭和31年まで初代の病理学教授として活躍された教室です。その御縁で、岡林篤教授には、私が病理学の道に進んだ後にも多くの御指導を賜り、また折にふれて先生の思索に満ちた病理観をお聞かせいただきました。岡林先生のこれらの御言葉は、私が病理学者として歩む上での道しるべとなっています。

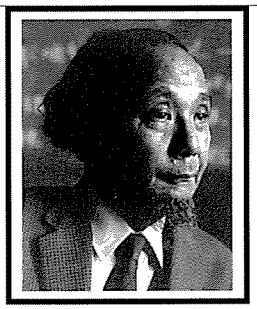
ふりかえってみますに、千葉大卒業後は主に大阪の地で歩んできた私ですが、大阪市大の諸先生方の御指導、御厚情とともに、岡林篤教授や藤本輝夫教授をはじめとするゐのはな同窓会の諸先生の御指導、御厚情に支えられて、ここまで研究を続けてくることができたように思います。この紙面を借りて、あらためまして厚く御礼申し上げます。

オランダ留学後、私の研究の主たる分野は心臓・血管の病理学へと移り、最近は特に動脈硬化をはじめとする種々の血管病変のメカニズム解明を第1の研究テーマにしております。今後も、さらに多くの若い力を結集して、多くの新知見を出すべく、全力で研究・教育に取り組みたいと考えております。

今後とも、同窓の諸先生方の一層の御指導、御鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

千葉大学名誉教授　福山右門先生を偲んで

嶋田　裕（昭35卒）



福山右門先生は、平成10年10月2日肺炎のためご逝去されました。享年88歳でした。

先生は昭和10年満州医科大学をご卒業後、同大解剖学教室に入られ、中国東北人の動脈、脳、筋の解剖統計的研究と、唾液腺の神経終末の研究をされました。

昭和12年より東北帝国大学に留学し、動眼神経核やエジンガー・ウエストファール核と赤核との融合関係の研究をされました。

昭和13年に満州医大講師になられ、神経終末の組織学的観察、中国東北人の血管や筋の研究、脳の計測的・比較解剖学的・線維解剖学的研究のほかに、中国東北部の原住民についての人類学的観察も手がけられました。

昭和16年に召集令状を受け取り、数多くのデータを残して戦地に赴かなければならなくなりました。特に、苦労して蒐集した蒙古人脳の観察に着手する寸前での召集で、これを論文にすることができなかったことを後日非常に悔やんでおられました。

最初はソ連国境で防疫にあたられました。連合軍との開戦後には南方への転戦を命ぜられ、その途中輸送船が沈没するという災難に遭遇されました。次いでビルマ国内各地での防疫にあたられました。敗戦後は英軍の捕虜となり、昭和22年に筆舌に尽くせぬ6年の苦難ののち、帰国されました。

同年、東北大学に助教授として迎えられて解剖学専攻の再出発をされました。昭和24年に福島県立女子医学専門学校教授、同25年に福島県立医科大学教授となられました。ここで先生は自律神経系の研究に着手し、「扇形細裂標本法」という独創的な末梢神経系の研究法を考案されました。そして形態学上からみた線維構築を、ウォーラー変性実験と組み合わせることにより、神経線維を起源的に分け、機能構築学を加味した末梢神経解剖学を体系づけられました。

昭和36年に千葉大学教授となられ、自律神経の中における側副路や内臓反射などに関係する求心性線維路

おくやみ

木村玄洋（昭3）
幸島春夫（昭3）
佐藤保雄（昭6）
福山右門（満大昭10）
武藤邦宏（長崎昭13）
宮田　誠（東医昭16）
小西善麿（専18）
吉岡　淳（昭19）
斎藤宏三（昭21）
鴻巣智也（昭22）
手島第一郎（昭23）
坂本　泉（専23）
池田公明（専24）
小林陽一郎（専24）
三橋　泰（専24）
土井弘正（昭25）
三村孝一（昭26）
宗像一郎（東邦42）
麻薙徹三（昭21）
降矢　震（昭22）
佐藤和男（昭26）
佐々木三雄（専26）
中野喜久男（昭31）
石田逸郎（昭41）

を解明されました。昭和48年には第78回日本解剖学総会会頭、昭和50年には東京で開催された第10回国際解剖学副会頭をつとめられました。

先生は教育にも常に情熱を傾けられ、実習体の前で懇切な指導にあたられ、学生より多大の敬慕を集められました。学生運動の激しい頃、教務委員長としてのご苦労と、学生が遺体を放置して運動に走った時のご心痛はどんなに大きかったことでしょう。「どうか人間性だけは失わないでほしい」との先生の訴えは学内外に多くの共感を呼び、部分的ながらストが解除され、実習だけは終了することができました。あのような時代に心を通じ合うことができたのも、先生は学生を愛し、学生もそれを感じとっていたからだと思います。

学内では附属図書館医学部分館長、学外では日本解剖学会理事、日本自律神経学会評議員、日本医学教育学会運営委員、文部省学術審議専門委員をつとめられました。

昭和50年に14年間つとめた千葉大学を退官され、続いて金沢医科大学教授を同55年までつとめられました。昭和61年に千葉大学名誉教授となられました。先生の教室からは12名の方々が教授となり、全国各地で活躍されております。

金沢医大退職後は、福島において解剖学実習書の挿図をお描きになったほか、多くの草花の絵を残されるという悠々自適の生活をされておりました。

先生の多大なご業績に対し勲三等旭日中綬章の叙勲があり、またご逝去後には正四位に叙位されました。

ご遺体は先生の生前の希望により千葉大学に献体されました。先生の在りし日の面影を忍びつつ、ご逝去を悼み、心からご冥福をお祈りいたします。

（解剖学第一講座教授）

クラス会

白兎会（昭和17卒）

我がクラスでは平成9年12月末よりこの一年間に、稲村 満、三浦 寛、内田成和、梅澤 勉の諸君が相次いで亡くなったので、卒業の時79名だった級友が35名（うち4名は音信不通）と次第に少なくなってしまい寂しくなった。我がクラスは、長い間白兎会として年中行事を行ってきたが、平成9年の卒業35周年記念行事を最後にして、今後は有志による懇親会を年2回行うことにした。

平成10年11月14日㈯に秋の懇親会を東京ステーションホテルに於て開催した。出席者は、浦田、大村、高橋、中村、本間、水間の6名のみの少人数であったが、故人の奥様方が内田夫人、浦部夫人、数馬夫人、木村夫人、佐久間夫人、橋爪夫人、三浦夫人の皆さん7名も出席して下さったので賑やかになった。会の初めにこの一年間に亡くなられた諸君の御冥福を祈って黙祷を捧げた。ついで、幹事の水間からこの一年間会員の動静を報告し、懇談に移った。各自それぞれ近況報告や所感を述べ、約3時間ごやかに楽しい歓談のひと時を過ごした。今回は特に内田夫人と三浦夫人から、内田成和君と三浦 寛君の病状、経過について詳しいお話があり、改めて2人の故人を偲んだ。今後もこのような会を春、秋2回、交通の便を考えて東京ステーションホテルで開催することを約束し、名残を惜しみつゝ、散会した。

次に、大村 光君は、11月23日に三越劇場で開催された日本医家芸術クラブ主催の第44回邦楽祭の席上で、長年にわたり美術部員として活躍したということで、大石武一委員長から賞状と記念品が授与された。大村君は新宿南口で開業していたが、既に2年前に閉院し、現在は画家として絵画に専念している。ゐのはな美術展にも第1回より出展している常連であるので、御存知の方も多いと思う。去る11月17日より22日まで東京銀座画廊美術館で第12回大村 光個展を開催し、今までの作品を沢山出展してあり、大変すばらしい絵画展で盛況であった。同時に立派な画集も発行されて入場者に贈呈して下さった。今後益々の御活躍を期待している。

（白兎会幹事 水間正冬）

もぐら会（昭和23卒）

五十周年記念会

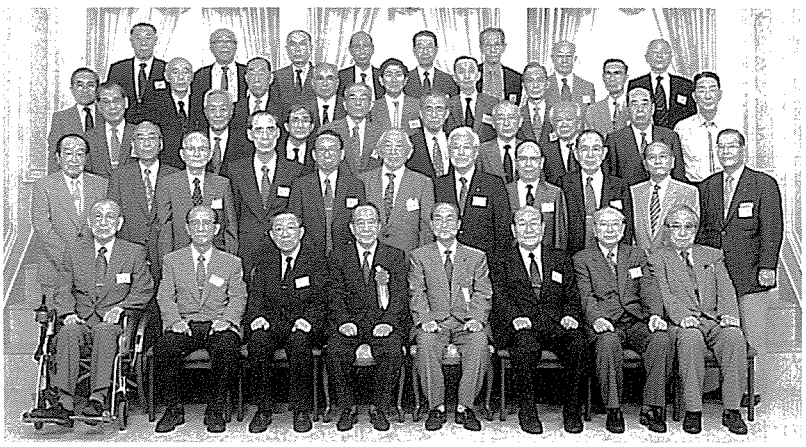
昭和19年10月入学、空襲により、防空壕に身を潜め、基礎教室焼失、敗戦後の混乱や、食料不足に耐え、昭和23年卒業、インターン、全学科の国試を経て医師となりしわれら、もぐら会は、9月19日、卒後五十周年記念会を久し振りの千葉市で持った。

記念会に応じた18名を乗せたバスは、政令指定都市千葉駅前通りをゆく。周囲の建物の壮大さに、「昔の奈良屋は？」、「京成千葉駅は？」と、今は昔の物語りである。大学坂の変化少なきにホッとしつつ旧病院前に着く。

谷口医学部長、山浦院長の厚意により、案内を得て、猪鼻台医学部の現状を知り、学科増加によりやがて医局、研究室となるべき屋階大講堂を懐しみ、屋上より見る千葉市街の変貌に再び驚き、連絡道路を若き日に戻って歩き、新病院を見る。築後20年を経て既に改装中であった。

中島君の尽力でこのオプションは大変良かったが、休日にも拘らず医局員を伴い案内して呉れた新任の河野小児科教授は、我等の卒業せし昭23年、将にその年の誕生と聞き、全てに時の流れの速さを思った。クラス会場に到る道すがら、ポートタワーから海岸道路を通り、この辺りが曽ての葦簀張りの海の家、蛤、浅蜊取りの遠浅の海岸とは思えぬようであった。

午後4時、全員集合42名、ゲストの、当時病理の井出源四郎、薬理の川島恂二両先生を混えて記念撮影。開会に続いてこの一年に逝去された山口覚太郎君の冥福を祈って黙祷、次いで幹事代表吉田亮君より歓迎の辞、及び、新しい医学教育に就ての話があった。続くゲストの挨拶は何れもわが卒業前後を偲ぶに相応しい楽しいものであった。



中島（博）君の音頭で一同乾杯、まずは、6卓のテーブル毎で、久し振りの歓談に花が咲く。司会の伊東に促され、遠路参加、久し振りの出席者が発言。市川、波田野、小西、海老原、車椅子で参加の嶋村君と続いた。

次に行われた萩原君苦心の作、スライドを用いての昨年の二二会は卒後50年という節目を迎えたので、

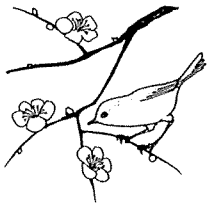
二二会（昭和22卒）

「昔々物語」では、われら学生当時の教授各位、小池、森田、鈴木（重）（解剖）、鈴木（正）、福田（生理）、赤松（医化）、林、小林（薬理）、羽里（細菌）、滝沢、石橋（病理）、谷川（衛生）、加賀谷（法医）の基礎学科、臨床では石川、堂野前（内科）河合、鈴木（五）、瀬尾、中山（外科）、詫摩（小児）、岩津（産婦）、伊東（眼）、久保（耳咽）、佐藤（皮泌）、荒木（精神）の先生方にお会い出来て、一同、画面の変わる度に口跡を真似、癖を表現しての歓声があがった。

時に限りあり、次期幹事を市川君と決め、伊藤（力）君の閉会の挨拶で、楽しい歓談の続きは来年に、と再会を約し、拍手を以て、卒後五十年記念〝もぐら会〟は了った。

（出席者）有賀光、井上正士、伊東和人、伊藤力、板垣修造、市川平三郎、中島博徳、岩間定夫、上野高次、窪谷満雄、海老原恒雄、大津饒、木村滋、工藤興一、窪田金次郎、黒須吉夫、小西義男、斉藤嘉一、柴田鉄郎、嶋村欣一、杉山靜也、高村良平、寺田俊郎、戸沢澄、奈良四郎、中嶋元、波田野基一、萩原彌四郎、林易、平岡直、平沢顕一、広瀬震一、藤井日出男、堀江昌平、前田裕、松下幸二、松山茂、宮崎隆次、吉岡宏三、吉田亮、吉田作、吉牟田重徳。以上

（伊東和人 記）



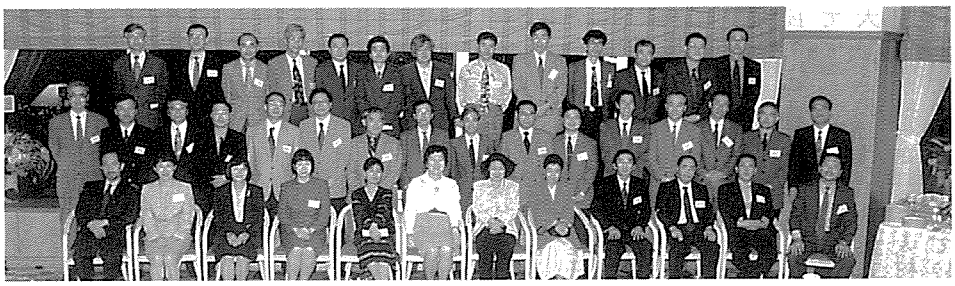
貫洞夫人の御実家である伊東〝いずみ荘〟で盛大に行われたが、今年は趣向を変え、5月23日午後1時より千葉舞浜のリゾートホテル〝東京ベイヒルトン〟で行われた。夫婦5組、会員15人、故人となった会員の夫人2人、計27人であった。

4月29日春の生存者叙勲が発表されたが、会員からは三橋、前田、村浦の三君が授勲された。三君を祝いまた参加者全員の健康を祝福して乾杯を行った。古稀を過ぎやがて喜寿を迎える年令ともなると毎日が大事である。年一度の同期会は貴重であり時の過ぎるのも惜しい憶いであった。来年は沖君におねがいして群馬で一泊の旅行をすることになった。お互健康を大事にの合言葉で散会した。

出席者

安藤毅、伊賀多朗夫妻、家本誠一、石郷岡寛、石橋文太、今井力、沖真澄、笠川猛、一井正、神山英明、貫洞一夫夫妻、清水健三、内藤徹郎、新田実男夫妻、平林一郎、前田実、三橋公平夫妻、村浦公二夫妻、茂又真祐、若月美博、有益安子、中川雅子（新田実男）

クラス会48（昭和48卒）



昭和42年入学48年卒のクラス会が卒後25周年という節目を迎えて、平成10年10月31日皇居の見えるレストランで12名の世話人（代表、高安）の音頭で催された。関東一円と遠くは九州、広島、そして、ガーナ（アフリカ）から45名の仲間が参加し、江頭泰平君、高田邦安君、福山右門名誉教授に黙祷を捧げ、25年のタイムワープを楽しんだ。いずれも社会の中堅的指導者として活躍しており、今後の発展と互いの健康を祝して乾杯。二次会はカロリー制限つき吟味された会が準備され、37名が参加し3年後の再会（次期世話人代表、河野君に決定）を約し散会した。出席者：秋葉哲夫、猪股弘明、岩田泰子、内田宏子、岩本逸夫、伊藤よしみ、大久保秀樹、大槻俊夫、大内美南、小川富雄、大塚裕、片桐博子、金井英夫、金塚　東、川上　義、高圓博文、河野陽一、小林道生、坂口　明、佐藤展将、下山一郎、白井厚治、園　信義、鈴木晴彦、高島常夫、高安賢一、竹中正治、千葉次郎、出浦喜丈、中村　明、野口哲夫、野村　馨、羽鳥文麿、服部義博、広谷忠彦、福田　健、保高由美子、保坂亜莉沙、南　昌平、森山紀之、矢加部茂、安野憲一、山本義一、横山淳一、吉田明夫（敬称略、文責　下山一郎）

五窓会（医専23卒）

例年、各地で開かれるクラス会「五窓会」も、平成十年度は、昭和23年卒業以来、五十周年の記念すべき年を迎え、10月17・18日の2日にわたり、地元在住の幹事諸兄の骨折りで、千葉に於て開催された。

1日目は幕張プリンスホテルで総会、東京在住の橋本眞クラス代表幹事の報告事項のあと、本年度に他界された、坂本泉、荻野正之の両君をはじめ、在学中すでに故人となられた5名と、卒後の物故者25名、計30名（クラスの約4割）の亡き友への冥福を祈って黙祷、ついで懇親会に移った。

その夜は、各地で被害をもたらし、13名の死者を出した台風10号の通過時間に当り、不安の一夜のなかにも、北は小樽・秋田から、西は浜松・長野、そして関東各地から、夫人同伴を含めて35名の参加をみたことは、歓ばしい限りであった。

なかでも、長年病気療養中の不自由な身の長島正孝君が、夫人付添いのもと、車椅子で参加される熱意は感動的である。

想えば、かつての大戦さなか、昭和18年春、希望に満ちて迎えた入学式後は、戦時空襲下の夜間授業もあり、終戦直前の千葉市空襲下では、悲運にも焼夷弾直撃による焼死で、2名の友を失った。奇しくも同姓の、伊藤文明、伊藤昌也の両君は、いわば、全学生の身代りともいうべきか、今なお、哀惜の念は消え去ることはない。

戦後の大きな転換期混乱のなかで、卒後、わが国に初めて課せられた身分保障のない1ヵ年のインターン制度の義務や、医師国家試験への戸惑いと不安のなかに過ごした、当時の青春期がほろ苦く甦り、齢すでに七十歳代半ば近い友も、歳月の流れ、時代の推移に、それぞれが感慨一入深いものがあったであろう。

翌2日目は、千葉市「花の美術館」で、色彩豊かな花模様を賞でてから、一同待ち望んだ、かつての千葉医科大学附属病院の面影を求めて、新しく生まれ変わった、現千葉大学医学部へと足を運んだ。

そこには、戦前・戦後、医学の殿堂としての威容を誇った、昔のままの懐かしい姿があった。

日曜休日で閉門中であったにも拘らず、地元越川衛幹事の骨折りと、大学側の

ご好意で、快く参観を許され、それこそ、卒業以来50年振りの者も、身のしまる想いで、足を踏み入れたことであろう。

内部の区分や、室名の標札は変わっていても、そこには、多くの先達・恩師・先輩の方々が築きあげた、輝かしい業績と診療の蓄積が、もの言わぬ建造物の到るところに沁み込んで、えもいわれぬ気品を漂わせている。

ここには、豪華で現代風な構築物を寄せつけない、威厳と風格が備わり、訪れる人に、畏敬の念を抱かしめるのも、歴史と伝統の重みであろう。

かつて、われわれを育んでくれたこの大学病院も、あの戦時下には、空襲目標をそらすためか、全身をコールタールで縞模様に塗りたぐられ、ともに苦難の時代を背負った姿を、いまや、知る人は少ない。

各階に佇むごとに、いまは亡き多くの恩師の温顔が甦り、凝縮した一瞬の青春に立ち戻り、思わず眼頭のうるむ感動も、老いのなせる感傷であろうか。

なお立ち去りがたい想いを残し、次の目的地、木更津へと向かった。

創業百年の味処「宝家」で、貝料理に舌鼓をうち、懸念された台風10号の余波のなか、開通1年を迎えた東京湾アクアラインに入り、〝海ほたる〟に憩い、一路、海底をくぐり抜けて終点、東京へと向かった。

同窓50周年の交流は、長く胸の底にとどまり、千葉大学の一層の発展活躍を祈念せずにはいられない。

そして、この2日間の世話役として、地元在住の幹事諸兄のご苦労に感謝をこめて―。

（文責　香取　郁雄）

各地ゐのはなだより

板橋ゐのはな会

板橋ゐのはな会を、6月17日にひらきました。7名の参加でややさびしい会でしたが、それなりに、家族的で楽しいひとときでした。本会から、貫洞先生にご出席いただき、最近の総会および東京ゐのはな会の活動について、お話いただきました。

おいしい料理を食べ、美酒に酔いながら、二世代にわたる思いで話や、最近の社会情勢についてなど、はばひろい話題でもりあがりました。次の機会には、今まで出席されなかった方も、ぜひご参加ください。きっと世界がひろがります。

（服部芳夫　記）

阪奈和地区ゐのはな会

平成10年10月3日(土)にホテルグランヴィア大阪の20階で、阪奈和（大阪・奈良・和歌山）地区ゐのはな同窓会が開かれました。

本会には約40名の会員がいますが、最近若手の会員が少なくなってきているのが残念です。

この日は、事務局を担当して下さっている石川正士先生から阪奈和地区ゐのはな同窓会の足跡についての説明があり、この5年間に物故会員となられた岡崎清秀先生（東医昭13）、賀陽豊麻呂先生（専18年）両先生のご冥福を、参会者一同でお祈り申し上げました。

今回は5年ぶりの同窓会であり、昭和50年卒の上田（旧姓、藤原）眞喜子先生の大阪市立大学医学部第2病理学教室教授就任をお祝いする会としました。

会長の藤本輝夫先生（元本学第2病理助教授、元札幌医大教授、現大阪市大名誉教授）のご祝辞と上田先生への花束贈呈がありました。藤本先生は大阪市立大学での上田先生の病理学の恩師であり、「女性に花束を渡すのは初めての経験だ」と照れておられました。宇佐見先生の乾杯のご発声の後は、ビルの照明に彩られた梅田の夜景を背景に、生活習慣病や現代学生気質の話題、懐かしい恩師や学生時代の思い出など話は尽きず、時の経つのを忘れました。晩餐も終わりに近づき、主賓の上田先生から病理学の教授に至るまでの、事に触れては同窓の先生方に助力を頂いた経緯や、主婦と母親と仕事の3役をいかに工夫してこなしているかといったユーモアに溢れた挨拶がありました。

2時間半の歓談も和やかに過ぎ、参会者は上田先生の専門である「PTCA後の血管病理」など冠動脈硬化の病理像に関する論文の別冊を頂戴して、三々五々帰途に着きました。

当日の出席者の写真です。

（敬称略）

前列左より宇佐見暢久（昭31）、上田（藤原）眞喜子（昭50）、藤本輝夫（東大昭22）、後列左より石川正士（昭32）、林良輔（昭50）、清島啓治郎（昭35）、奥真一（昭24）、藤田龍五郎（昭27）、栗原正（昭47）、村上圭司（昭32）、中尾照逸（昭50）。（中尾照逸　記）

静岡県支部総会

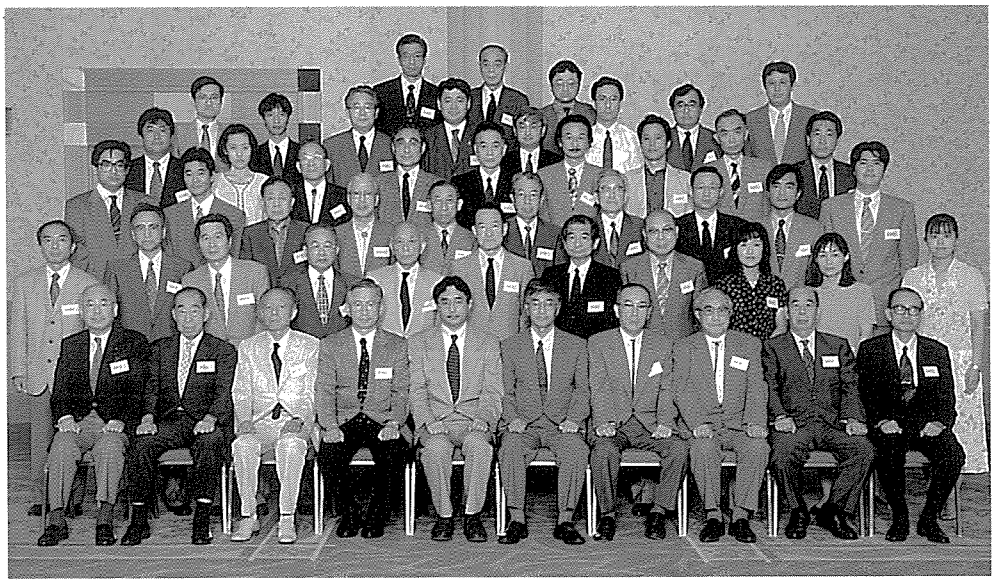
去る平成10年8月1日、浜松市のアクトシティー・コングレスセンターにおいて2年に一度の定期支部総会が西部地区の担当で開催された。

議事総会に先立ち聖ヨハネ会桜町病院ホスピスの山崎章郎先生（昭50）による「ターミナルケアーホスピスの立場から」、および谷口　克医学部長による「新しい免疫系とその機能」の2つの学術講演が行なわれた。

議事総会では野末道彦支部会長（昭33）が役員会で中村　武前会長（昭20）から会長就任を要請された経緯などを述べられ、支部会報「ゐのはな静岡」の発刊など支部としての日常的な活動を充実させて行く方針を表明された。この会報は今後年2－3号を発行し、会員相互の交流の場として利用して行きたい。

総会の時点で静岡県の会員数は二四三名であったが、前総会以降に亡くなられた会員の先生方が6名おられ、ご冥福を祈って出席者全員で黙祷を捧げた。

懇親会は隣接するオークラ・アクトシティホテル浜松にて行われ、まず植村研一浜松医大脳神経外科教授（昭34）の開会の挨拶があり、引き続き勝呂　安県医師会長（専20）の挨拶があった。勝呂医師会長より県の丸山浩健康福祉部技監（昭58）に県の医療行政で大いに御協力頂いているとの紹介があり、丸山技監にもご挨拶頂いた。このようにゐのはな同窓会員が県内の重要な部門で活躍されている



ことは頼もしいことである。

谷口医学部長には千葉大学の現状について、大学院大学への移行の経緯や学長選など最新の情報をご報告頂いた。

中島浩二先生（昭21）のご発声で乾杯し、宴席に移った。西部地区担当の場合は出席者が少ないのではと懸念されていたが、60名と前回並の出席があり盛会であった。帰りの時間を気にしないでよい面々は、二次会に繰り出し谷口、山崎両先生を囲んで遅くまで歓談されていた。

なおこの席上、中村　武先生に長年の支部会長としてのご功績に感謝して記念品を贈呈する手はずになっていたが、健康上の理由でご欠席となり実施出来なかったことは残念であった。

また浜松医科大学に看護学科が開設されたことなどに伴い、千葉大学看護学部出身者が多数おられ、同じゐのはな地区の出身者であり協力して行こうという支部会長の意向もあった今回案内を出し、実際に出席してもらっている。

静岡県では昨年浜松医大精神神経科に伊豫雅臣助教授（昭59）が就任され、本年4月には聖隷浜松病院（堺　常雄院長（昭45））呼吸器内科が関連施設となるなど、ゐのはな会員の活躍が続いている。同窓会としても活発な活動をして行きたいものである。

（記・宮本恒彦、昭54）

東京ゐのはな会新年会

平成11年1月9日、目白椿山荘に於て恒例の東京ゐのはな会新年会が開催された。午后2時から武野良仁先生の司会のもとに長沢仁一副会長の開会の挨拶で始まり、先づ小幡裕副会長より役員交代の説明があった。次で貴洞一夫会長より加納六郎前会長御病気のため会長に推挙された経緯、東京ゐのはな会の歴史、将来の抱負等の挨拶があった。次で総務担当の小川源太郎先生、広報担当の小杉秀雄先生、編集委員長の村瀬靖先生、経理担当の山上健次郎先生、勤務医部会担当の浜野恭一先生等より夫々担当部署の現状が報告され、大池和祐先生の司会の挨拶で会議を終了した。

新年会は小杉秀雄先生の司会により午後3時半頃より開かれた。先づ第二代東京ゐのはな会に長嶋田守之先生の発声で乾杯が行われた。次で来賓として御出席の予定であった全国ゐのはな会会長の井出源四郎先生は急用のため御欠席となり、代わって本部より出席された萩原彌四郎全国ゐのはな会参与が登壇され挨拶された。全国ゐのはな会、東京ゐのはな会の歴史が披露されたるまた同じく来賓として出席された千葉県ゐのはな会会長渡部武先生、群馬県ゐのはな会会長沖真澄先生の挨拶があり各県の活動が報告された。なお、千葉大学教授千葉胤道先生からは猪之鼻奨学会の紹介と大学の現状並に将来についてのお話があった。

本年は例年になく多数の参加者があり、特に卒業年次の若い会員の参加が目立った。この若い会員は司会者の指名で夫々自己紹介が行われいつになく活気の見られた新年会であった。お互い歓談は尽きなかったが、午後5時に別れを惜しんで散会となった。

（新田実男　昭22）

平成10年 秋の叙勲

寺島　東洋三 氏（昭24）
勲二等旭日重光章
新井　正 氏（昭21）
勲三等旭日中綬賞
上野　高次 氏（昭23）
勲三等旭日中綬賞
大谷　克己 氏（金沢昭21）
勲三等旭日中綬賞
恒元　博 氏（金沢昭27）
勲三等瑞宝章
渡辺　武 氏（昭27）
勲四等瑞宝章
鈴木　忠男 氏（専23）
勲五等双光旭日章
大木　誠止 氏（昭15）
勲五等瑞宝章
山上　健次郎 氏（専17）
勲五等瑞宝章
叙位　故　福山右門 氏
（満医大昭10）正四位

平成10年度 第二回常任理事会議事録

日時　平成10年11月25日(水)
場所　ペリエホール
出席者　井出源四郎、加納六朗、貫洞一夫、近藤洋一郎、国井光智、沖真澄、茂又真裕、萩原弥四郎、長沢仁一、渡辺武、小幡裕、大藤正雄、三枝一雄、大井利夫、阪信、佐藤甫夫、嶋田裕、増田善昭、木内政寛、伊藤晴夫、税所宏光、大沼直躬、中島祥夫

議事

一、今回は春秋を含め多数の叙勲者があり、また学内昇任者を含め、四金会に招待することが審議決定された。

二、ゐのはな同窓会副会長の加納六朗先生が健康上の理由で辞任され、貫洞一夫先生が後任副会長に就任することに決定した。

三、医学部学生用図書購入のため、昨年に引き続き本年も一〇〇万円の特別助成を行うことに決定した。

四、次年度より同窓会事務量の増加にともない、パート事務員を採用することに決定した。これに伴う予算措置については2月の常任理事会で更に審議を行なうことになった。

報告事項

一、平成10年10月末中間決算について担当理事より報告があり、今後の財政運営につき次回理事会で引き続き検討することになった。

二、同窓会名簿を平成11年11月に発送予定である。

三、ゐのはな同窓会賞の募集を開始した。

四、会報の一一八号、一一九号は内容の増加などの為まとめて発行した。

五、その他、会費納入の促進などについて意見交換があった。

四金会　引き続き同所で、四金会が行なわれた。三枝理事の司会で、井出会長の挨拶、貫洞副会長の乾杯に始まり、和やかに歓談の時を過ごした。会なかばで、一七名にもおよぶ叙勲者、昇任者の先生方についてご紹介があり、寺島東洋三先生、磯野可一学長をはじめ叙勲、昇任された各先生方よりご挨拶や抱負などを伺った。今年は特に出席者も多く活気溢れる会であった。このような交流を通じてゐのはな同窓会、ひいては千葉大学がますます発展することを期待している。

（文責　伊藤晴夫）

編集後記

次号から、猪鼻台にある辛亥革命の碑について、井出源四郎ゐのはな同窓会会長が紹介してくださる予定です。五月の発行をお楽しみに。

（鈴木信夫 記）